



『安全管理と忠臣蔵』

宮川安江

忠臣蔵といえば、歌舞伎、歌の世界で有名であるが、主人公の大石内蔵助が為してきた行動を安全管理の上から検証してみたと思う。

事のはじめ

元禄 14 年 (1701) 江戸城御殿の松の廊下で、播州赤穂藩主 たくみのかみながのり 浅野内匠頭長矩 が高家筆頭吉良上野介 こうすけのすけよしなか 義央 に斬りつけるという事件が発生した。

事件当日の 3 月 14 日は、京都の朝廷から派遣された勅使と、上皇から派遣された院使に、将軍が対面する儀式が行われる予定でした。

幕府は恒例として毎年正月に、朝廷に年賀のため将軍の代理を派遣。朝廷からは、勅使と院使が幕府に遣わされるというもので、これを迎える接待役として、勅使接待役、播州赤穂 5 万石藩主浅野内匠頭長矩を、院使接待役を伊予吉田 3 万石藩主 だてさきよしのすけむらとよ 伊達佐京亮村豊に任命した。

その指南役として高家筆頭の吉良上野介 こうすけのすけよしなか 義央があたり、両家から挨拶に伺うのが常となっていた。そのときに手土産として伊達家は、「加賀絹数巻・黄金 100 枚・狩野探幽の双幅」を送った。

一方浅野家は、挨拶であるから気持ちだけで十分と、「鯉節 1 連・巻絹 1 巻」のみでした。赤穂は天日製塩で良質な塩の生産で藩の財政は豊かであったのに、上野介は不満であった。以前から浅野家と吉良家はいざこざが多く、

○吉良上野介は浅野内匠頭の夫人阿久里に横恋慕した

○吉良が皇位継承問題に介入したため、尊

皇家・山鹿素行の門下である長矩が怒った
○長矩の美少年な児小姓を吉良が望んだが断った

○赤穂の天日製塩で良質な塩の生産技術の伝授を断った

そこで指南役である吉良上野介のいじめが始まった。その内容は

・勅答の義の日の礼服は烏帽子大紋なのに長袴でいいと嘘を教えた

・勅答の義の日の時刻を吉良が嘘を教えた。

・料理について「勅使様精進日であるから精進料理にせよ」と嘘を教えた。

・増上寺への勅使参拝のため畳替が必要なのに長矩にだけは教えなかった。

・浅野の用意した墨絵を吉良は「勅使様に無礼である」として金屏風に替えさせた。

・長矩は勅使を迎える位置について尋ねたが教えなかった

など、ことごとく恥をかかせた。

これは明らかにパワハラに該当する。

厚生労働省の専門家会議で、パワハラとは、「業務の適正な範囲を超えて精神的、身体的苦痛を与えること」と定義している。

長矩は精神的なうつ状態になっていると思われる。

そこで 3 月 11 日勅使と院使が江戸城に到着。12 日将軍に賀詞を伝え、13 日饗応

・能楽、14 日将軍が勅使と院使が対面、謝辞を述べる儀式が白書院で行われ、大奥留守居役梶川与惣兵衛が松の廊下で吉良と話していたとき

「この間の遺恨覚えたるか」

と長矩が上野介に刃傷を働いた。

このことを側用人柳沢出羽守保明から将

軍綱吉に報告、綱吉は、浅野内匠頭に即日切腹を命じ、吉良はおとがめ無しとなった。

江戸幕府創設以来の「喧嘩両成敗」の鉄則を破り不公平なものであった。

赤穂藩 5万 3000石はとりつぶし

翌3月15日680キロの道程を4昼夜半かけて赤穂国元留守居役大石内蔵助良雄に連絡、家中総登城し、事情説明の上、城下に騒動が起こらないよう、民心の安定のため、藩札の引き替え準備にかかった。藩札発行高1万2000両だったが、藩の金庫は7000両しかなかった。塩田業者などの貸付金を回収し、6分替えて引き替えた。しかも下に厚く上に薄い累減率で整理した。

4月19日城明け渡し

城の明け渡しには合戦がつきもの、幕府収城使脇坂淡路守4500人、木下肥後守1500人総計6000人の体制で赤穂城に到着したが、大石はこれを迎え、本丸にて引き渡しの書類を渡した。

5月21日大石は城下の遠林寺で残務整理し、6月24日浅野家の菩提寺花岳寺で100か日法要を営み京都山科へ向かった。

同志との連絡の取りやすい場所山科西野山麓にいたが、吉良・上杉では、討ち入りを予測して、スパイを放ち、大石の動きを探らした。

大石は、復讐の計画が察知されるのを心配して、祇園「一力茶屋」で遊びふけて、敵の目をあざむいた。

討ち入りのための作業計画

現状を見つめ、→どうすれば良いか思考の統合→作業行動

元禄15年3月14日亡君の1周忌を営んだ後6月に江戸に向かい、上方の同志を誘い、復讐の相談をした。当初は130人でしたが50人になり、山科から鎌倉に向かい、川崎の隠れ家にて討ち入り作戦に入った。リスクアセスメントの実施。「危険性有害

性の特定」「リスクの見積」「リスク低減のための措置の検討」「決定・実施」。

KY活動「現状の把握」「これが危険のポイント」「対策の樹立」「目標設定」

討ち入りの日程の決定

○情報の収集

上野介が本所の屋敷にいる日吉良邸を探索のため大高源五は、上方商人脇屋新兵衛と称し、吉良家出入りの茶の湯の宗匠四方庵宗偏へ弟子入り、上野介の在宅を調べる。

12月6日吉良邸で茶会が開かれる予定でしたが、将軍が柳沢美濃の守邸に出向くことで茶会は延期された。

14日年忘れの茶会が開かれるとのことで、横川勘平も三島小一郎と変名して、茶道の宗匠をしている僧侶が吉良邸に呼ばれている。僧侶は文字が下手で返事の文章もわからないとのことで、僧侶と親しくなり、12月10日、勘平が僧侶を訪ね、「招待された返事の代筆を受け、吉良邸へ届けることまで買って出て、吉良邸に潜入し、偵察、14日は間違いないとの確認を行った。

○周囲の情報収集

元禄15年夏

前原伊助は米屋を開き吉良邸の周りを観察し、出入りの者を調べる。

大高源五は茶人に扮して吉良邸に出入りする仲間から上野介の行動を探る。

堀部安兵衛は剣道道場を開き、討ち入りに使う道具を集める。

○吉良邸の現場検証

本所松坂町（現在の墨田区両国）
東西130m 南北60m 敷地面積 2500坪
偵察時の心得

吉田忠左右衛門は「偵察の夜回りする時刻は、九つより八つ七つ」つまり午前0時から4時まで「人通りも少なく、少しでも目立つので、怪しまれぬように十分きおつけるように」「物売りに変装して偵察する

場合は、声もその場にふさわしい声の大きさを考えて行動」と偵察時の手順書に急所が入っている。

討ち入りの為の作業準備

○討ち入り準備の隠れ家

本所林町、吉良邸から 900m

本所は、人口が増えすぎたため、新しく開かれた街であり、地方の人々が住み、見知らぬ同志が軒を並べる街で、地方から出てきた単身赴任者や学生が暮らすアパートの街ですから出入りが激しく、お互いに無関心の街である。

「秋深し 隣は何をする人ぞ」

○武器を集める

刀と脇差…一人一組

槍… 2 2本(2間槍 3.6m、 9尺槍 2.7m)

部屋の中の戦いでも使えるよう、短くした。槍は安全圏から立ち向かえる。切るより突く方がダメージが大きい

大身槍・十文字槍… 2 本

薙刀… 3 本

弓矢

刀は力技、槍は少ない力で突ける。

鉄砲は当時は火縄銃、一発撃つと次に時間がかかる。雪や雨に不向き。鉄砲の音がすると、近隣の武家も見逃さない。

かけや…門や戸をたたき破る

木槌・金槌…羽目板を外す

かぎ縄…外から梯子を掛け、内側はかぎ縄を使う

かすがい…屋敷の長屋は周りを囲んで警備武士が住んでいる。長屋の扉は 1 本レールで両端を釘・かすがいで止めてしまうと開けることができない

ドラ…合図用で歌舞伎では山鹿流の太鼓ですが実際は太鼓は使用していない。

がん灯…照明用で中のローソクが倒れ

ない構造のもの

火消しの道具…大半が大工道具と破壊道具。当時は延焼しないように破壊消防であった

衣装…鎖帷子、小手、脛当て

鎧甲に鉄砲は「合戦」になり幕府の反逆になるため、火消スタイル

創意工夫

全員の意見を収集し、今までの体験・経験の中から、改善、アイデアを提案検討した。(問題発見能力。応用力・思考力・空想力・慣性力)

○討ち入りのコースの検討

午前 3 時すぎ 47 人が怪しまれずに吉良邸にたどり着くには、どういうコースがあるかの検討

現状の把握

集合場所は吉良邸と 1Km の所にある本所のそば屋

①大名、旗本の屋敷が建ち並ぶ武家地コース。

そこには辻番がある。今の交番である。辻番は当時次のように歌われていた。

「辻番は 生きた親父の 捨て所」

「辻番は 槍が通ると 本を読み」

「辻番とおもえば ウナギを焼いている」
当時の辻番は、形骸化していた。

②町民長屋が密集する町人コース

狭い道で、町内ごとに木戸があり、夜 10 時になると閉じられる

③吉良邸までまっすぐ延びる水路を船に乗っていくコース

堅川を船で行くと、吉良邸から 100m のところで上陸できる。

○討ち入り時刻

午前 4 時

人間は生理的に、午前 4 時は一番体温の低い時刻で、突然起されても、ウォーミングアップしないと運動をすることができない時刻。

○討ち入り時の配置

適正配置

年齢構成は15歳～75歳で50歳代は10人、当時の老人である。残り37人は実戦経験が無い。実戦経験者は「高田馬場の仇討ちの堀部安兵衛」のみです。

適正配置の仕組みとして、作業の特性を考え、作業者の特性を考える。作業の種類・形態・内容、作業条件、環境を考え、年齢・業務歴、労働能力などを考える。

特に高齢者は、バランス機能の低下、聴力・視力の低下疲労回復の遅れなどが見られるが、判断力があり、集団行動も協調性があり、注意力があり、熟練技能を生かせ、創意工夫がうまい事が挙げられる。

指示命令

まず目的を考え、能力を考え、具体的に指示する。

目的は吉良上野介の首のみで、若手は突入部隊、年配者は後方援助部隊。

討ち入り

桂三枝の講談の中に「雪がしんしんと降り積もり、そば屋に集まった47人」

「今日は月こそ違え、怪しく殿の命日」とあるが、雪は降っていなかった。

すばやく二手に分かれ、一方は頑丈な作りの表門に梯子を使って塀を乗り越え、一方は裏門は作りが弱く、かけや・木挺子で扉を打ち壊し突入

この日は150人近い家来がいた。

三人1組になって屋敷に突入（3人はまとまりやすい人数）

外の防護に当たる者は、庭中左右を走り回り、大声で「50人組は東に回れ、30人組は西に回れ」と叫んだため、声に恐れたか、吉良方に出会った者は一人もいなかった。

表門から切り込んで屋敷に弓矢が並べてあるのを見て、その弦を払い、使い物にならなくした。

屋内で戦う者は19人で、屋外は28人が

3人1組で助けながら戦う。一組の人数が多いと同士討ちになりかねない。3人ですと意見もまとまりやすく一人が伝令に飛ぶこともできる。

長屋は120人いたが、雨戸は全部閉まっており1本レールのため両端を釘で留めてしまえば、雨戸は動かなくなる。長屋は4畳ぐらいで、一つ一つの部屋で壁で仕切られていて、隣同志の情報交換ができない。

戦闘開始1時間経っても上野介が見つからない。

上野介はどこに

そのとき吉田忠左右衛門は、「そもそも隠居と申すのは、奥座敷の裏に建てて申すことこそ世の常。もう一度、その当たりをしかと吟味すればいいかと」といい、奥座敷の台所脇にある炭部屋に踏み込み、午前6時に討ち取った。その足で、東京高輪の浅野内匠頭が眠る泉岳寺の墓前に吉良上野介の首級を供え、報告した。

死傷者数は吉良側は死者17人、負傷者28人であるが、赤穂側は数人の軽傷者のみでした。

事件の顛末

午後8時に大目付の仙台伯耆守邸にて取り調べ後、熊本藩主細川越中守、松山藩主久松隠岐守、長府藩主毛利甲斐守、岡崎藩主水野監物の4家にお預けとなり、元禄16年2月4日午前10時に4家に通達があり、処分は武士の名誉を重んじて切腹とした。

同日午後2時幕府の検使立ち会いのうえで、順次切腹し、その後泉岳寺に埋葬した。

大石内蔵助は「忠誠院刃空浄剣居士」の法名で、47士全員に「刃」と「剣」のついた戒名となっている。

この事件は、綿密な計画、調査、準備、実行が成功のカギとなり、参考にすべき点が多くあるように思える。